ひとりごと

「揺蕩う 」

学生時分、日本語学を専攻していた私にとって、初めて耳にする言葉を調べる時のバイブルは決まって『日本国語大辞典』、通称『日国大（ニッコクダイ）』である。現在主流の「第二版」は、全 13 巻＋別冊1の合計 14 巻であり、内容を凝縮した「精選版」（私はスマホアプリ版をインストールしている。）でも3巻というボリューム。それらには私たちが普段使うもの使わないものを含めおおよそ全ての日本語が収録されている。本紙のタイトルを考える際、悩みぬいた末、その『日国大』に収録される数多の日本語の中からこの言葉が適当と選んだ。

「揺蕩う（たゆた・う）」【揺蕩・猶予】
…水などに浮いているものや煙などが、あちらこちらと定めなくゆれ動く。
ひと所にとまらないでゆらゆらと動く。ただよう。

小学校の卒業アルバムの将来の夢を書く欄に「公務員」と書いた。周りが「野球選手」や「社長」などと書く中、実におもしろくも子どもらしくもない回答である。不景気の影響で父が失業し、家庭が大変だったため幼心に不安がない暮らしを望んでいた。中学生になり、某国立大学教育学部の附属校に通うようになった。年中多くの教育実習生と関わる機会があり、教員を志す学生の言葉や熱意に感化され、教育＋公務員という道を考えるようになった。高校生になり、当時自分は理系であると信じていた私に（国語のテストでは赤点だった私に）、国語科の恩師がこう言った。「君には国語の才能がある。だから、国語もしっかり勉強してね。」言われたとおり国語の勉強をしたら成績が向上し、得意科目になり、国語の先生になりたいと思うまでになった。大学では言語学を専攻しながら教職課程を履修し、中高の国語の教員免許を取得した。教育実習では、別の恩師から意外な言葉をかけられた。「自分の教え子が教職を志してくれることを本当に嬉しく思う。でも、本心を言うと、今の教職は本当に大変で苦しいことも多い。世の中にはたくさんの仕事があるから、社会全体を一度見てから、それでも熱が冷めなければ、その時は学校へ戻っておいで。」急ぎ就活をした。先生方のためになる仕事がしたくて、教育行政職に就いた。そこには文部科学省出身者も多く、直属の上司たちもそうだった。上司から「ぜひ、文部科学省へ行ってもらいたい。そして、教育現場のために多くのことを学んできて欲しい。」と背中を押してもらった。
出会えた様々なご縁を信じて、まさに揺蕩うこと二十年弱。現在、文部科学省で働くに至る。

自分の人生は大方成り行きに任せている。抗えない境遇も別の誰かの熱も、自分のためにかけてもらった言葉や用意してもらった機会も。一つ一つは小さな巡り合わせに過ぎないが、それら全てのおかげで今の自分があり、自分一人では決して想像も実現もできなかった場所にこうして立っている。そしてここでは、立場の異なる多様な人間全員が、我が国の教育の振興のため同じ目標に向かって熱をもって働いている。『日国大』に劣らないほどの厚み、冊数の法律本、資料の数々を駆使して今日も教育委員会等からの照会に対応する。日々耳にする言葉、いわゆる“霞が関用語”は、『日国大』にも載っていない初めて聞く言葉ばかりで、ここではバイブルも機能しない。まるで異国を放浪しているような新鮮な毎日である。
…かなり遠回りをしているが、もちろん教職への熱、教育現場への熱は未だ冷めない。さて、次はどこを揺蕩うか。

（K・I）

「教育委員会月報　令和８年６月号　No.920」

・**発行・著作** 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課
・〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
・TEL：03-5253-4111（代表）
・URL：https://www.mext.go.jp

文部科学省